
砂の船

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂の船

【Nコード】

N5578J

【作者名】

杜若

【あらすじ】

幼いころの出来事と、それによってつけられた大きな傷跡がもとで、人の目を恐れコンビニのバイトでわずかに社会とつながっている浪人生の佐々木。
あるとき彼は同じような雰囲気的女子高生と知り合う……

第一話 出会い

1

「佐々木はん、コレも張つといてくんはなれ」

目の前にどさり、と置かれたチラシにため息をつきながら

「はい」

と佐々木は店長の半井に返答した

A5サイズの薄っぺらな紙には

1リットルサイズの牛乳パックに顔と手足が

つけられた絵が

「さあ、良い子のみんな牛乳を飲もう」

と叫んでいる。

「ミル君」と言らしいこのキャラは、佐々木がバイトをしている
コンビニ「ハッピーストア」の親会社である大手乳製品会社の

販売促進用キャラらしいが、いくらゆるキャラ、擬人化流行りの
今日であつても、あまりに安直だ。

「……おれだつたらもつとましなものを作るなあ」

と呟きつつも、佐々木はノロノロと表のガラスにチラシを張る作業
を開始した。

秋も大分深まってきて、冷たい風が街路樹にこびりついた枯葉を揺
らしている。

それを見ながらそろそろおでんの季節だなあと考え、

苦笑が浮かんだ。

飯にも自分は浪人生の身の上だ。普通だつたらこの時期は受験の追
い込みであり

そのことで頭がいっぱいになるはずなのに、なんで真っ先に思い浮
かぶのが

気分転換と収入手段を兼ねたコンビニのことなのだろう。

「1年働いているうちになじんじやったのかな、俺」

独り言は、いつ始めたのか覚えてないほど幼いころからの癖だ。いくら記憶をひっかきまわしても背中しか思い出せない両親は、多分、自分のことなどほとんど関心がなかったのだらう。

自分で自分に話しかけてやらなければ、空に溶けて消えてしまいそうな

不安感が常に心の中にあつた。

どんなに小さくとも確実に耳に届いてはいただろうに、ついに一度も両親は

その独り言に一度も応えることなく、

ある日突然二人してついていけないところに旅立ってしまった。

無責任、となじりたい気持ちもあるが、一方であの両親らしい、ともため息混じりに思うこともある。

「これ、終ったら上がってくれてかまへんでえ」

「はい」

仕事が終わるのはほっとする、だがそれだけだ。この後の予定は特に無い。

冷えきった部屋に帰って、パソコンを見ながら出来合いの夕食を食べるだけ。

昨日も一昨日もそうだった。そしてこれからも多分ずっとそうだろう。

参考書は一週間前から開いていない。予備校の授業は出ているが内容は右から左だ。

「俺、大学行って何したいんだろう」

張り残したチラシを片付けながら、佐々木は又呟く。

特にやりたいことがあるわけでもない。ただ、両親がある程度資産を残してくれたので

周りに合わせてなんとなく受験をしてみても、落ちた。

そしてまた、なんとなく浪人生活を送ってみてはいるものの、大学生活にも、その先に行く人生にも何の期待も見出せなかった。

どうせ、これまでとおなじことが繰り返されるだけだろう。

両頬と右手、さらに服を脱げば胸と背中についた大きな傷跡に向けられる視線。

遠慮がちに、しかし「怖いもの見たさ」という名の好奇心が見え隠れする問いかけ。

真実を話せば、同情と哀れみがたつぷり詰まった言葉が一度だけかけられる。

言葉を濁せば、可能な限り猟奇的に捏造された噂話がひそひそと、自分以外の耳から耳へと囁かれる。

そして、どんな場所でも遠巻きに見つめられるだけで、ずっと一人ぼっち。

いつからか、生身の人間がたまらなく怖くなった。

と、同時にこの傷をつけられたときに自分の人生は終わったのだと思うようにもなった。

狭いコンビニの、さらに狭いレジカウターの中で必要最低限の会話を交わし、

機械を操作して、給与を得る。それは自分に一番合った生き方かもしれない。

たまに襲ってくる寂しさは、携帯やパソコンの液晶画面の中の文字のやり取りで解消できる。

恋愛は、平面世界の美少女達との擬似行為で十分だった。

「……あの、レジお願いします」

か細い声に佐々木は我にかえた。長いだけの癖のある髪の間から上目遣いに見上げれば、

この辺りでは有名な隣の市の名門女子高の制服を着た女の子が立っている。

今時珍しい背中までの長さのある髪は、佐々木と違って手入れが行き届いているものの

真っ黒で、重そうな印象を与える。前髪も目の上ぎりぎりまで伸びていて、

女の子の表情をひどく判りづらいものにしていた。

普通なら澆刺さが、はちきれそうに詰まっている年齢なのに、まるでもう人生に疲れきってしまったような影が顔にこびりついている

悪い意味で目立つその女の子は、週に2、3回来る常連さんだ。

「すいません」

独り言と同じように口の中でもごもごと呟いて

佐々木はレジの前に立ち、差し出された飲み物に機械を当てる。

レジに表示された金額を、女の子はさりげなくブランド名が入ったチェックの財布から取り出して

トレーに乗せた。と、その時にコートの袖口が少しめくれ上がり白い手首と、そこにはしる

無数の赤黒い傷跡が見えた。佐々木の手が一瞬とまる。その視線に氣付いたのか、

女の子が慌てて手を引っ込めた。

「……そんなことやったって、何の解決にもならないよ」

ぼそりと呟かれた言葉に弾かれたように、女の子は飲み物を掴み取ると足早に店を出て行った。

「またなんかはったんか？」

店長の声に、佐々木は首を振りながら

「じゃ、ありがとうございます」と言っ、エプロンを脱いだ。

どうして、もつと俺はもつとまじない方が出来ないんだろう。と心の中で呟きながら。

ダウンジャケットを羽織っていても、突き刺さってくるような寒さの中を

佐々木が地面だけを見つめて黙々と歩いていると、か細い女性の悲鳴が耳に飛び込んできた。

思わず顔を上げると、人垣の中から

「大丈夫、しっかりして」

とやはり悲鳴のような叫び声が聞こえる。

普段だったらそのまま通り過ぎてしまったらう、だが、見覚えのある制服と

地面に転がるハッピーストアと印刷されたビニル袋から半ば飛び出た飲み物が、

佐々木の足を人垣の方に向けた。

はたして、人垣の中心にいたのは先ほどの女の子で、のどに両手をあてて

苦しそうに短い呼吸を繰り返している。

その肩に手を当てておるおると同じ問いを繰り返しているのは、首から募金箱を

下げた中年の女性だ。おそらく女性の方も相当あわてているのだろう、指先が

力の入れ過ぎか真っ白になっていて、爪に塗られた紫のマニキュアが異様に鮮やかに見えた。

考えるより先に、佐々木の体は動いていた。

「これを口に当てて」

女の子に駆け寄って飲み物が入っていたビニル袋を差し出す。

「できる範囲でいいからゆっくり呼吸して」

二、三回ビニル袋が膨張と縮小を繰り返すと、女の子の呼吸が徐々に落ち着いてきた。

「念のために救急車呼んでください」

「は、はい」

募金箱をぶら下げたまま女性が駆け出していく。

集まっていた野次馬たちは、これ以上のことが起こりそうにないとわかると皆無言で立ち去っていき、それと入れ違うように

救急車のサイレンの音が遠くから聞こえてきた。

続く

第二話 病院にて

「そうか、佐々木君だったのか。彼女を連れてきてくれたのは」

救急車が彼女を搬送したのは、この街では一番の規模の坪内総合病院。

自分のかかりつけ医でもある羽生医師ついはの言葉に、佐々木は

「どうですか、彼女の具合は」

とたずね返した。やや長めの半分白髪の髪が縁取った、細面の神経質な顔とは裏腹に

ざつくばらんで人懐こいこの医師は、佐々木が顔をあげて会話ができる数少ない相手だ。

「うん、いま救急救命の小鉢先生こはちが診ているけど、多分、大丈夫だよ」

「そうですか、よかった」

佐々木が胸をなでおろした時、羽生医師の背後の個室の扉が開いて、青い手術着の上に

白衣を羽織った外国人のように彫りの深い顔立ちの医師が出てきた。
「バイタルも血圧も問題ない。おそらくパニックで過呼吸発作を起こしたんだろう

現場の処置がよかったから大事にならないで済んだ。羽生先生、後は先生の領分ですね」

「だそうだ、よかったな佐々木君。君のお手柄だ」

「お、君が処置してくれたのか。ありがとう。しかし羽生先生どうして彼の名前を」

羽生医師は苦笑しながら佐々木に問いかけるような視線を向けた。

「あ、あの実は俺、羽生医師の患者なんです。」

その、お、俺も時々過呼吸を起こすからそ、それで」

クリーム色のリノリウムの床を見つめながら、つかえつつかえ説明する

佐々木の頭上でふむ、とうなずく声が聞こえた。

「なるほど、それで迅速な措置ができたんだな。しかし、佐々木君だったか。怒られて

いるならともかく、褒めているんだから顔くらいあげてくれよ」

「すいません」

消え入りそうな声であやまりながら、佐々木はそれでも床から目を上げることができない。

自分の顔を見た小鉢医師がどんな顔をするか、想像しただけでこの場から逃げ出したい気分になる。

「あんまり無理強いないでくれ、小鉢先生。彼も色々抱えてるんだ」

と羽生医師が助け船を出した時、

「羽生先生、木之口さんが目を覚ましました」

再び開いた病室の入り口から顔だけ出した看護師が告げた。

「お、気が付いたか。じゃあちよつと診てくるかな。佐々木君、彼女が気を失ったのは

救急車に乗る前、乗った後？」

「乗った、後です」

「わかった、ありがとう」

頷いて羽生医師が病室に姿を消すと、じゃあ俺もこれだと小鉢医師も去って行った。

俺も帰ろうと佐々木は手に持っていたダウンジャケットを羽織る。

救急車が到着した時女の子の知り合いはいないかと呼びかけたのだが、答えるものはない

しかたなく同乗して、病院で倒れた時の状況などを事細かく説明したのだが、

どうやらもう役目は終わったようだ。

なんにせよ大したことがなくてよかった。安堵のため息をついて立ち去ろうとしたその時

「佐々木君。木之口さん、ああ、君が助けた患者さんがお礼を言い

たいそうだ」

羽生医師の言葉が、佐々木の足をとめた。

「あの、みつともないところを助けていただいて、ありがとうございます」

ベッドの上で上半身を起こした女の子、

木之口は小さな声でお礼を言っ て深々と頭を下げた。

「別に謝ることはないと思うぜ、病気なんだから。みつともなくもないし」

ぶつきらばうな佐々木の答えに、びっくりと木之口の体がこわばる。

それを見て、ああなんで俺はこんな言い方しかできないんだろうと佐々木は頭を抱えなくなった。

同じ年頃の女の子と話すなんて恐ろしく久しぶりで、

意識すればするほど緊張してますます不機嫌極まりないような話し方になってしまう。

「佐々木君の言うとおりだよ。過呼吸発作は立派な病気の症状のなんだから

みつともないなんて思う必要はない。今日は念のために病院に一泊していきなさい。

今御両親にも連絡したからすぐにきてくれるよ」

御両親と羽生医師が言ったとき、長い前髪で半ば隠された木之口の表情が

はつきりとこわばるのを見て、佐々木はおやと思った。

「また、心配させちゃうわ」

棒読みのような木之口の言い方に、ますます違和感が増す。

あまり両親と仲が良くないのかな、と思ったが口に出すことでもないので佐々木は黙っていた。

「えっと、じゃあ俺はこれで」

これ以上話すことは何もないだろうと思って佐々木がそう言う「あの、もうちょっといいですか、多分、両親もお礼を言いたいと

思うんです」

相変わらず白い上布団に視線を落したまま、木之口が引きとめた。

「あ、あかまわないけど」

「うん、じゃあ御両親が来たらナースコールを押してくれる？」

私からも病状を説明したいから」

と言つて羽生医師が立ち去ってしまうと、

残された二人の間には重苦しい沈黙だけが残った。

なにか会話をしていた方がいいと思うのだが、

浮かんでくるのはコンビニの接客マニュアルの言葉ばかりで、

結果佐々木は床を、木之口は布団を見つめたまま時間だけが過ぎていく。

「繭ちゃん、大丈夫。倒れたって聞いてびっくりしたわ」

だから慌てた声とともに中年のきちんとした身なりの男女が部屋に入ってきたとき

佐々木は心底ほつとした。

「大丈夫よ、ママ。そのの、ええと」

「佐々木、です」

「佐々木さんが救急車を呼んでくれたから」

「そうなんです、ありがとうございます」

多分よほど心配していたのだらう、型どおりの例を述べて母親は再び娘に向き直り、父親らしい男性の方も無言で頭を下げただけで、娘の枕元に近寄る。

今度こそ本当に退場時間だ。

顔をじろじろ見られなくてよかったという安ど感と一緒に

佐々木がそつと扉に手をかけた時

つんざくような木之口の悲鳴が部屋に響き渡った。

「ど、どうしたの繭ちゃん」

「こないで、こないでいやあああ」

「落ち着きなさい、繭。お母さんだよ」

両親の呼びかけにもかかわらずベッドの上で激しく

木之口は体をよじつて悲鳴を上げ続ける。

「先生、羽生先生。すぐ来てください」

廊下で張り上げた佐々木の大声に、すぐに白衣姿が走ってきた。

「発作だな、佐々木君悪いけどそのハンドタオルかして」

木之口の姿を一瞥して羽生医師は佐々木の手から、

先ほどからかれが手持無沙汰にもてあそんでいたハンドタオルをむしり取った。

その勢いで廊下にてしまった佐々木の鼻先でびしゃりと扉がしめられる。

中からかすかに聞こえる悲鳴と、落ち着いてとんだめる医師の声に胸が重くなるような思いを抱えながら、佐々木はゆっくりと歩き出した。

同じ発作を抱えた同じ年ごろの木之口のことを気の毒だとは思ったが彼女とはほんの一瞬だけ手を触れあっただけの関係。

次回会うことがあったとしてもそれはコンビニの客と店員としてだろう。

そんな木之口にこれ以上自分ができることは何も、なかった

第三話 再び コンビニにて

「あのう」

バイト先のコンビニで雑誌を整理していた佐々木に、遠慮がちな声がかけられたのは
5日後のことである。

「ああ、君は」

顔にかかる長い前髪を払いながら、ぼそぼそと口の中で呟いた佐々木に

木之口は小さく頷いた。綺麗だがひどく重そうな黒髪がかすかに揺れる。

「先日はありがとうございました」

「……元気になったのならよかった」

もうちょつと気の効いた言葉はいえないのか、と自分でも思っのだが唇から放たれる言葉は、そっけなく無愛想なものばかりだ。

「あ、あの。これ」

「すいませーん、レジお願いします」

背後から聞えた声に、佐々木は軽く木之口に目礼すると足早にレジの中に入った。

時刻は正午少し過ぎ。この辺りは会社が沢山ある割りには食事のできる店が少なく

夕方、学校帰りの中高生が押し寄せる時刻と並んでもっとも忙しい時間帯である。

おまけに今日はもう一人のバイトが風邪で欠勤していて、

佐々木は一人で客を捌かねばならず、ようやくレジ前から行列が消え店に静けさが戻った頃には、時計の針が一時を回っていた。

さすがに疲れを覚えてため息と共にカウンターに寄りかかったとき、
「あのう」

もう一度声がかけられた。

「え、待っていたの？　今まで」

こくと頷く木之口に、佐々木は悪いことをしたなあと、頭をかいた。

「佐々木君、昼いつてくれてかまわんでえ」

バックヤードからかけられた半井店長の声に押し出されるようにカウンターから出ると、

「お昼、食べた？」

佐々木は木之口に訪ねる。首を振る彼女に、清水の舞台から飛び降りるような

気持ちで再度話しかけた。

「よかったら、外で話す？　待たせたお詫びになんか奢るよ」

木之口が倍の激しさで首を振ったのを見て、やっぱりなと心の中で深くため息をついた。

両ほほに目立つ傷のある、暗い顔をしたコンビニのバイト。こんな自分の

誘いにのってくれるわけがない。予想をしてはいたが、胸の奥にちりりと

うつかり熱いものに触ってしまったかのような鈍い痛みがはしった。

「ごめんね」

それだけをぼそりと呟いて、ダウンジャケットを羽織って店の外に出ると

なぜか木之口もついてきた。

最初は方向が同じかと思っただ、5分たってもまだぴったり後をついてくるので

「どうしたの？」

と尋ねると、

「だって……外で話そうって貴方が……」

消え入りそうな声の答えが返ってきた。

「え、だって今嫌だって首をふったじゃないか」

「あの、だって、奢ってもらっわけにはいいかないから、それで……」

深くうつ向いて地面を見つめながら言い続ける木之口。

「どうやら彼女は奢ってもらうという部分に対してのみ首を振ったつもりらしい。」

「じゃあ、ハンバーガーでいいかな」

「はい」

それきり会話は続かず、佐々木の半歩後ろを木之口がついていく形で二人は

駅前の赤字に黄色でシンボルマークが描かれた看板の、ありふれたファストフードの店に入った。

「あの、これありがとうございます、えっと、お名前が、まだ」セツトメニューの乗ったトレイ片手に店内の一番奥まったテーブルに向かい合って

腰を下ろしたとたん、木之口はテーブルにぶつかりそうな勢いで何度も頭を下げながら、きちんとたたまれたハンドタオルを差し出した。

羽生医師に渡したままになっていたモノだ。

「佐々木……兵衛^{ひょうえ}。ありがとうございます、わざわざ洗濯までしてくれたんだ木之口さん、でよかったよね」

受け取ったタオルからは微かにいい香りがする。

「はい、木之口、繭^{まゆ}です。柔らかくてフワフワしたものを握っていると

落ち着くからいつもハンドタオルをもっているんですけど、この間は濡らしてしまつて……先生が佐々木さんの処置がよかったから

おおごとにならないで済んだって、あの……」

言葉を濁した木之口に佐々木は苦笑する。

やっと羽生医師がタオルをもぎ取って行った理由が分かった。

「うん、俺も過呼吸の発作持ちなんだ。大分良くなったけど、刃物を包丁とかカッターとか、はさみでも見ると怖くて何度もパニックを起こした。」

木之口さんはもしかしたら、マニキュアが駄目なの？」

さつと表情を強張らせた彼女に、佐々木はしまったと心中で頭を抱えた。

募金箱を抱えた女性も、木之口の母親も爪を綺麗に塗っていたのでつい尋ねてしまったのだが、少し考えれば過呼吸の原因なんて人に話したくないに決まっている。

「ごめん」

彼女の顔ではなく白いテーブルにつけられた傷を見つめて、佐々木は口の中で謝った。

どうして自分はいつも人の心にひっかき傷をつけるような事を言ってしまうんだろう。

「あの、タオルのキャラクターかわいいですね」

「え？」

その言葉にやつと顔を上げると、重い黒髪の下のピンク色の唇が精いっぱい笑みを浮かべていた

気を使わせてしまったと申し訳ない気持ちと、

許してくれたんだと嬉しく思う気持ちが同時に湧き上がる。

「そ、そうかな」

佐々木の手の中で広げられたタオルには、あの「ミル君」が大きくプリントされている

牛乳の一リットルパックのおまけにつけるように、とハッピーストアの各店舗に親会社から

配られたものだが、コンビ二では余りでないサイズなので大量に余っていたのを

ハンカチがわりに一枚もらったのだ。

「よかったらあげるよ」

「え、でも」

「どうせもらった物だし。きにいったのならどうぞ」

「……ごめんなさい」

再びうつむいて謝る木之口に佐々木は戸惑う

「お礼を言いに来たのに、ずうずうしい事を言って

本当にごめんなさい」

また何度も頭を下げる木之口に佐々木の頭は真っ白になってしまった。

こんな時、何と云えばいいんだろう。

考えれば考えるほど思考は空回りするばかり。

「じゃあ、このタオルが君の物になるのは運命だったと云えばいいんじゃないか」

とつさに口をついたのは自分でも穴を掘って埋まりたくなるほどくさいセリフだった。何処かで聞いたことがあると思ったたらコンビニで毎日流れている

映画のCMの中の主人公の台詞だ。

暗記するほど聞いているからと言ってなんでこんな時にと云ったがCMの台詞は

さらに口から流れ続ける

「君の喜びと悲しみの涙をこのタオルは拭きたがっているんだよ」
ぷつと木之口が堪え切れないう風吹きたした。

「それ、映画『君の為にあげられるもの』のCMの台詞ですよね」

「そうそう、こんな場面にぴったりだと思つて」

「佐々木さんって面白い人ですね」

そのまま木之口は笑いだす。重かつた空気が一気に消し飛んだ。

「そ、そうかな」

面白いなんて言われたことは初めてで、照れかくしに佐々木はトレイの上の

ポテトをめつたやたらと口の中に詰め込んで、喉が詰まった。

「だ、大丈夫ですか」

「う、うん。本当に遠慮しないで。コンビニにまだ在庫が山になっているんだから」

コーラでようやくポテトを胃の中に流し込んで、そう云つと木之口は本当にうれしそうにありがとうございます。とタオルをポケットにしまった。

その明るい表情に佐々木もほつとする。

と、壁に掛けられた時計が二回、チャイムを鳴らした。

「あ、そろそろ戻らないと」

次の混雑時間がやってくる。

冷えたハンバーガーを二口で平らげて、佐々木は席を立った

「木之口さんはゆっくりたべていつてよ」

「私も、もうでます」

殆ど手がつけられていないセットの乗ったトレイを片手に

木之口も席を立つ。

そのまま無造作にそれをゴミ箱に捨てようとしたので、

佐々木はつい

「それ、もらっていいかな」

と言ってしまった。

「え？」

「あ……あの、まだ食べられるし、俺、ひ、一人暮らしたから夕飯に、するよ。あの、意地汚いと思われるかもしれないけどお、俺食べ物だけは、捨てられなくて、だから」

つつかえつつかえ説明する佐々木に、木之口は

「そう言うの、素敵です。私の方こそ食べ物を粗末にしてごめんなさい」

とハンバーガーとポテトを紙袋に入れて手渡してくれた。

「ありがとう」

笑われるか、気まづくなるのを半ば覚悟していた分彼女の素直な言葉は

佐々木の心に暖かく染みた。

「じゃあ、私はこれで」

「うん、じゃあね」

軽く手を上げた佐々木に応えるように、木之口も手をふる。

コートと制服が下がり、露わになった幾つもの手頸の深い切り傷。

それを見たたん、佐々木の中の暖かい気持ちがずっと冷めていく

「あ、あの」

「さようなら」

何か言葉をかけようとした途端、木之口は身を翻して
雑踏の中に消えた

続く

第四話 ガラス瓶の中

「そうか、木之口さんが自分でタオルを返しに行ったのか」

「はい、でもあの、先生なら判ると思うんですけど、俺は口下手だし気もきかないから、その、彼女を傷つけたり怒らせたりしまわなかったか」

不安なんです……、あれから木之口さん、受診は……？」

晩秋の短い日の最後の一かけらが燃えるような色をして窓から差し込んでくる、

坪内総合病院心療内科診察室。

壁紙から椅子まで淡いベージュで統一された室内で、

佐々木は主治医の羽場と向かい合っていた。

月に一回の定期受診日。木之口とファストフードの店で食事をしてから

1週間が過ぎていた。

「他の患者のプライバシーを喋ることはできないよ」

穏やかな口調ではあるが、きっぱりとした主治医の答えに

佐々木はすいません、と絨毯に視線を向けて口の中で謝った。

少し考えればすぐにわかることなのに、俺は本当にどうしようもない。

「佐々木君、ちょっと顔を上げてごらん」

その言葉に従えば、少し困った表情を浮かべた主治医の顔が目映った。

「木之口さんは君と会っていた時はつきりと怒ったり、悲しんだりしていたの？」

「い、いえそう言うわけじゃないんですけど」

「患者のプライバシーを漏らすわけにはいかないけど」

「一つため息について、羽場医師は言葉を継いだ。」

「私の目から見て、君と木之口さんはよく似ているね」

「え？」

「人が怖くて怖くて仕方がない」

「人が、怖い？」

繰り返した佐々木に医師は静かに頷く。

「相手が怒ったらどうしよう、悲しんだらどうしようと必要以上に
思い悩むのは、

それを向けられたくないんだろう」

「……」

「そりゃあ怒られたり悲しまれたりするのは辛いけど、

まるで猛獣の檻に放り込まれたような怯え方をする必要もないよ」

「でも俺は、性格も暗いし、顔にこんな傷があって気味が悪いだろ
うし、それに

過呼吸発作なんて厄介な物もかかえているから……」

「だから存在するだけで人を不快にさせているかもしれない、かい
言おうとしたことを先取されて、佐々木は黙り込む。

「あのね、佐々木君」

医師の表情がまじめさをました。

「私は何度も君に、傷は過去の不幸な事故で発作は
その事故が原因の心の病気だと説明したんだけどな」

「す、すいません」

「謝らなくてもいいから、覚えていてほしい。世の中いるだけで人
を不快にさせる

人間なんていやしないんだよ。君がコンビニのバイトを続けていら
れるのがいい証拠だ」

「で、でも」

「明るく、社交的で口が上手い。世の中そんな人間ばかりじゃない
さ。

私は佐々木君より性格も暗くて口下手な患者さんを沢山診てきた」

「……はい」

「君が経験したことは余りにも辛すぎて、残った傷痕も大きい。

世の中と人全てが怖くなって当然だと思うけど

もうあれから十年近かった。そろそろビンの中から出ておいでよ」

黙りこんだ佐々木に穏やかに医師は語り続ける。

佐々木君は分厚いガラスでできたビンの中にいるみたいだね。

事あるごとに羽場医師は言う。

本当にそうだとしても、と佐々木は思う。

どうやって出ればいいのだろう。

「世の中は多分君が思うよりあったかい」

これも医師の口癖だ。佐々木はそう思ったことがないけれど。

「大丈夫、できるよ」

とさらに医師は続けて机の上にぽんとはさみを放り出した。

「……」

さつと手足が冷たくなり、鼓動が速くなる。

……怖い、怖い。でも……これは、まだ、あれじゃないから……

「ほら、はさみくらいは平気になっただろう」

「はい」

「じゃあ、いつもの薬を出しておくから。又来月、

そうそう、せっかく知りあったんだから、木之口さんと又デートでも

すればいいよ。リハビリがわりに」

「は、はあ」

曖昧にうなずいて佐々木は立ち上がる。

この医師のお陰で過呼吸発作ははさみくらいでは起こることはないくらい軽くなつて

何度も背骨が折れそうなほど重く沈んだ気持ちもすくい上げてもらった。

でも今日は、簡単にリハビリがわりのデートなどと口にした彼に無性に腹立たしさを覚えた。

そんな事がホイホイ出来るなら、こんな所の世話になんかなくてない。

だがその腹立たしさは表情にも言葉にも出ることはなく、

佐々木は黙って医師に頭を下げると診察室を出た。

「おや、兵ちゃんじゃないか。そうか、今日は定期受診の日だったね」

「久代小母さんどうしたの？どこが悪いの？」

会計待ちで座っていたソファから慌てて佐々木が立ち上がると、

「こつちも定期健診さ。なにせこの年になるとあちこちがたがきてねえ」

そう言つて久代はわざとらしくそらせた腰を拳で叩いた。

19才の佐々木の母親ほどの年齢でありながら、表情やちょっとしたしぐさに

匂うような色気がある彼女は、病院とバイト先のコンビニの中間にある

小さなスナックのママだ。

「で、どうだったの？」

心配そうに問いかける佐々木に久代はふふと笑った。

「今のところ少し血圧が高いくらいだよ。ありがとね、心配してくれて」

「ホテルのオーナーだけで十分に食べていけるんだから、いい加減に店を閉めればいいのに」

「やなこつた、そんなことすればボケちまうよ。まあ力仕事をしてくれる男手が時々

欲しくはなるけれど、どこかのだれかさんはとっと家をでていちまったしねえ」

「……ごめん」

小母さん、と佐々木は呼んだが久代と彼の間に血縁関係はない。

だが世の中にたった一人ぼっちで放り出されたばかりの頃、

唯一佐々木に暖かい手を差し伸べてくれた人だった。

「でも俺、いつまでも世話になってるのが心苦しくて、だから」

「あー判っているよ、何度も聞いたしね。今更また一緒に暮らしてくれなんて言わないよ」

指輪のはまった右手を顔の前で振って、久代は佐々木の言葉をさえる。

「だけどたまには夕飯を食べにくるくらいの孝行をしてもいいだろう？」

「う、うん」

「じゃあきまりだ。スーパーによって店に行こう」

そう言って久代はさつさと受付によってさりげなく佐々木の分まで会計を済ませる。

「もう、そんな事をしてくれなくてもいいのに」

先を歩く小さな背中を見つめながら佐々木は呟いた。

両親の遺産の利息とコンビニのバイト代で、慎ましくしていれば十分に暮らしていけるだけの

収入はあるのに、この人は事あるごとに援助をしてくれる。

俺は、そんな価値のある人間じゃないのに。

「そうそう、兵ちゃんこの間駅前ハンバーガー屋でデートしてたんだって？」

「ど、どうしてそれを」

戸惑う佐々木に久代は振り返ってにんまりとした笑みを浮かべた。

「久代さんの千里眼と地獄耳をなめるんじゃないよ、よかったねえやつと春が来て」

「そ、そんなじゃない。た、ただ貸した物を返してもらっただけだよ」

「そこから始まる恋があるかもしれないじゃないか」

「やめてくれよ」

ついに佐々木はめつたにないことだが、声を荒げた。

「恋だのデートだの……俺には一生関係ない、無縁の事なんだよ」

「そんな風に決めつけることもないだろう」

しばしの沈黙の後、ぽつりと久代がどこか悲しそうに言った。

「……ごめん、怒鳴っちゃって」

うつむいて謝る佐々木に久代は肩をすくめる。

「……怒りん坊をなだめるには、美味しいご飯が一番だね。

なにがいいだろう、寒いから鍋だね、すきやき、たらちり、キムチ

鍋」

謳うように言いながら再び歩き出した久代の後を、

佐々木はいつものように地面だけを見つめてついていった。

続く

第五話 疑問

佐々木が三度木之口と出逢ったのは、さらにそれから5日後の昼下がり。

バイトは休みで予備校の授業も午前中に終わり、今にも雨が降り出しそうな

重苦しい雲に覆われた空の下、風の冷たさも手伝って佐々木は足早に家路をたどっていた。

途中近道をしようとビルとビルの中の細い路地に入る、と

「やめてください」

抵抗というには小さすぎる声が聞こえた。

古いビルとビルの隙間にできた小さな駐車場。

その止められたバンの影に見覚えのある黒髪と制服の後ろ姿が引きずられていく。

「やめてください」

もう一度か細い悲鳴が上がる。

周囲に人影はない。

考えるより先に身体が動いていた。

「何をしているんだ」

男にしては甲高い、つまりちつとも迫力のない声を精いっぱい張り上げながら

バンの陰に回ると、泣きそうな顔の木之口と

その手首をつかんで下卑た笑いを浮かべる

三人の柄の悪い男達がいた。

「さ、佐々木さん」

「ああ、何だてめえは」

さっきよりもずっと大きな声で名前を呼びながら、

あいている方の手を精いっぱい伸ばす木之口と

上目づかいにこちらを睨みながら肩を前方に突き出して

じりじりと近寄って来る男達。

「き、木之口さんを離せ」

背中を冷たい汗が伝うのを感じながら、

佐々木は駐車場のしきりに使われている黄色と黒の

コーンバーを握り締め、青眼に構えた。

これでも高校卒業まで剣道部に所属していて

、三段の段位を持っている。もっともこの1年は

全く練習していないが。

「おい、やる気だぜこいつ」

男性にしては小柄でしかもバーを握る手が細かく震えている佐々木の姿に、

男達が馬鹿にしたような笑みを浮かべる

—— 先手必勝 ——

相手は嫌がる女の子を車影に連れ込むような輩だ。

木之口の手を握った男の喉元を狙ってバーをつきだす。

「ぐふう」

あやまたずそこを強打された男は、短いうめき声を上げて地面に崩れ落ちた。

剣道では絶対に狙ってはいけないと言われる急所の一つだが、

今はそんな事は言っていない。

「木之口さん、こっちにきて早く」

叫んだとたん、右のこめかみに激痛が走り視界が真っ赤に染まる。

急速に低くなる視界の端に、同じようにコーンバーを構えた残りの

男達の姿が見えた。

「てめえ」

「やってくれたな」

男達は口々にわめきながら、地面にうつぶせに倒れた佐々木の背中を容赦ない力で

蹴りつける。立ち上がる暇もないほどの連続した衝撃と痛みに気が遠くなった。

「佐々木さん、佐々木さん」

泣きそうな声が微かに聞こえる、ああ、俺ってなんて格好が悪いんだろう。と

ぼんやりと思った直後、耳をつんざくほどのポリウムでアラームが鳴り響いた。

「やべ」

「逃げろ」

慌てた声と遠ざかる複数の足音。静寂が戻ってから、佐々木はしばらく痛みの為に起き上がることが出来なかった。

「佐々木さん、しっかりして、佐々木さん」

何度もかけられた声にやっとのろのろと身を起こすと、清算機の非常ボタンに指をあてたまま、がたがたと震え続ける木之口の姿が見えた。

「……木之口さん、け、怪我はない？」

こくこくと頷く彼女に佐々木はよかったと笑いかけたたん、こめかみと背中に

酷い痛みが奔る。

「で、でも佐々木さんが、佐々木さんが怪我してる」

身体と同じように震える声で言ったたん、木之口の両目から涙が零れおちた。

「2週間前とは立場が正反対だな。珍しいぞ、こういう例は」

と佐々木の頭と背中の中の傷を診ながら、小鉢医師は苦笑交じりに言った。

坪内総合病院救急救命センター。

大丈夫だよと言いつける佐々木に、木之口は絶対に駄目ですと言いつけ

ついに救急車を呼びますと携帯電話を取り出した。

「そ、そんな大事にしないで、わかった。病院には行くから」

その態度に佐々木は慌ててたまたま通りかかったタクシーを留め最も行き慣れた病院に運んでもらった、というわけである。

「本来ならこんな軽傷は整形のじいさんに任すんだが、君は運がいいちようどこに誰も患者がいなかった」

と軽口を叩きながら包帯と消毒薬を持ってきたまだ若い医者をも

「おいおい、じいさんじゃなくて水地先生みずぢといいなさい。

高齢なのは事実だが、少なくともインターンの片君よりは腕がいい」
小鉢医師がたしなめる。

「あ、あのすいません。大した怪我じゃないのに無理に診てもらったみたいで」

「いや、片君の言う事なら気にするな。本当にインターンにしては腕がいいんだが口が悪すぎてね。それに頭の怪我は軽傷でも甘く見ない方がいい。血の巡りがいいから傷口の割には出血が多くなるし

頭蓋骨は無事でも中身が損傷している場合もある。それにここは今すぐに迅速な処置が必要な人が来る所だから、君はまさにそれなんだよ

はい、これでいいだろう。吐き気や物が二重に見えるなどの症状はないかな」

「は、はい。ありません」

応えた佐々木に小鉢医師は頷いた。

「背中せなかの打撲は2、3日痛みが残るだろうが、後はきれいに治るよ念のために1時間、隣の部屋で休んでいきなさい」

看護師に促されて佐々木は隣の部屋に移る。

「そ、そういえば木之口さんは」

「君の彼女か？ だったら化粧室で手を洗っていたよ」

別のベッドの患者の様子を見ていた片医師の言葉に、佐々木はえっと思った。

たしか病院について診察室に案内される時、彼女は手を洗ってきた

すと

化粧室の中に消えた。それからたつぷり30分はたっている。

「佐々木さん、大丈夫ですか」

と小さな声と共にそろそろと扉が開いて木之口が顔を出した。

「う、うん。大したことないけれど念のために1時間くらい休んでいけって」

「よかった」

ほっと安堵したように木之口は笑みを見せた。

それが大層可愛らしくて、佐々木は胸の奥が熱くなる。

「よかつたらそばでお話したら」

看護師にうながされて木之口はおずおずと

佐々木の腰かけているベッドまでやってきた。

気をきかせてくれたつもりなのか、カーテンまでぐるりと閉められてしまう。

僅か布一枚のしきりとはいえ、閉ざされた空間に二人きりになった。

「あの、よかつたらすわってよ」

「どうして助けてくれたの」

「え？」

「こんな怪我までして、痛かったでしょう」

「だってあのままだったらどうなっていたか……」

放っておけないよ」

「私なんて、私なんてそんな価値がないのに」

しぼりだすようにそう言って、木之口は両手で顔を覆う。

その手はガサガサに荒れていて、所々ひび割れさえできていた。

冬場、お湯で沢山の洗い物をした久代小母さんが同じような手をしていたことを佐々木は思い出した。

「まさか、ずっと手を洗っていたの」

かすかに木之口は頷いた。

「……リストカットの後といい、どうして君はそんなに自分を自分でいじめるんだ」

「汚いから……私は汚くて、生きている価値もなくて……だから、罰を与えなくちゃいけないの」

「なんで……」

そんな風に思うんだ、と佐々木が続けようとした時
場違いに明るい音楽が響き渡った。

「わ、ちょ、ちよっと」

慌ててズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

耳に当てると、タバコの吸い過ぎでハスキーになった艶を含んだ声が
飛び込んできた。

「兵ちゃん、怪我したんだって。大丈夫かい」

「小母さん、なんでそのことを」

「羽場先生が電話をくれたんだよ」

「……」

どうやらこの病院にかかっている限り、彼女の地獄耳からは
のがれられそうにない。

「うん、大丈夫。１時間くらい様子を見て何もなければ帰っていい
と言われている」

「そうかい、じゃあ夕飯を作っておくから店においで」

「あ、で、でも今は」

「この間のファストフードの店でデートした彼女をかばって怪我し
たんだろう」

一緒にいるならつれてきな。一人も二人も作る手間にかわりやしないよ」

……あの医師はなんでこんなことまで喋ったんだろう。

内心で深く深くため息をついて佐々木は電話を切った。

「あの」

「うん、知り合いから。夕飯作ったから帰りに寄れって

木之口さんの分も作るっていうから……よかったらおいでよ」

「え、で、でも」

「もしかして門限が厳しいの？」

勢い良く首を振った木之口に、佐々木は思い切って告げる
「じゃあ、つきあつてよ。なんだか今の君を一人にしておけない」
言ってしまうから気恥ずかしさに顔が熱くなった。
でもどうして、こんなに彼女の事が気にかかるんだろう。
断られたらどうしようかと思つたが、しばらくの沈黙の後
木之口は小さくうなずいた。

続く

第六話　あふれ出した心

「おや、えらいかわいいお嬢さんじゃないか
兵ちゃんも中々すみにおけないねえ」

ドアを開けるなりカウンターのなかからかけられた言葉に、
佐々木は耳まで赤黒くなった。

「そんな関係じゃないって言っただろう。」

それに俺の事いい加減兵ちゃんっていうのやめてくれない。
もう子供じゃないんだから」

「私から見ればまだまだ子供さ、さあ突っ立てないで座った座った」
精いっぱい抗議は、久代に軽くいなされてしまう。

「……あの、ここは」

店内を見回した木之口が不安そうに呟く。

数席のカウンターと三つのボックス席。そしてカウンターの内側の
棚に

ずらりと並んだ酒の瓶。まだ開店前のせいで客の姿はないが、
女の子、しかも高校生には無縁の店であることは一目瞭然だ。

「スナック『ククル』さ、表の看板見なかったのかい」

夜の化粧をした久代のすけすけとした言葉遣いに、

木之口が身体をこわばらせる。

「あの、心配しないで、この人は久代小母さん。その、親戚でもな
いのに」

俺の面倒を色々見てくれているんだ。

この店も飲み屋だけど、いかかわしい店じゃないよ」

「そういうことさ、さ、座つとくれ」

久代に再度促されて二人はカウンターに並んで腰を下ろす。

その前に湯気の立つ土鍋が一個づつ置かれた。

「怪我したんだから、こういう物の方が身体にいいだろうと思って
ね」

「久しぶりだな、小母さんの鍋焼きうどん」

蓋を取るとふわりと暖かい湯気がいい香りと一緒にたちのぼり、エビのてんぷらやシイタケがのせられたうどんがあらわれる。

「いただきます」

佐々木は箸をとったが、木之口は両手を膝の上においたままだ。

「遠慮しないで食べな、毒は入っちゃいないから」

「美味しいよ、これ」

二人に促されてようやく彼女は箸をとった。

一口目はいかにも恐る恐るといった風だった箸の動きが

徐々に早くなるのを見て、久代が笑みを浮かべた。

「しかし名誉の負傷だねえ、兵ちゃん」

「いや、みつともないよ。威勢よく助けに入ったのに

結局は彼女が非常ボタンを押してくれなきゃ、やられていたんだから」

「身体をはって助けに入った。それで十分さ」

「……ごめんなさい」

木之口の手から箸が滑り落ちた。

「木之口さん？」

「私なんかあんな目に会って当然なのに、

こんなに優しくしてもらう価値なんかないのに

それなのに、佐々木さんは怪我までして……」

言葉を詰まらせた木之口の瞳に涙がにじむ。

「え、えつとだから」

「ねえ、嬢ちゃんや」

慌てて何か言おうとした佐々木をさえぎり、

久代は厳しい表情を木之口にむけると、煙草に火をつけた。

「あんたに何があってそんなひねくれた考え方をするようになったかは

知らないよ、でもあんたはおぎゃーと生まれてから今まで、一人で生きてきたわけじゃない。

制服を見ればどうやら有名な私立女子高の生徒さんらしいし、
ご両親はさぞかし悲しいだろうね。大事に慈しんでいる娘が
こんなに自分で自分をないがしろにしている事を知ったら」
「慈しんでなんかいない！！」

唐突に木之口が声を荒げた。

「慈しんでいたら、あんな事なんかしない」

多分、押し殺していた感情が久代の一言で爆発したのだろう
悲鳴のような声は狭い店内一杯に響き渡った。

「き、木之口さん」

佐々木の面食らった表情に、木之口はすいません、と
慌てて頭を下げた。

「でも、それは仕方がないんです。私が、子供なのに
パパに色目を使って誘惑したから……だから」

「なんだよそれは」

今度は佐々木の怒鳴り声が店内に響き渡る。

「兵ちゃん、ちょっと落ち着きな」

叫ぶだけでは収まらずに、椅子から立ち上がった佐々木の肩を
久代がそつと叩いた。

「さて、お嬢さん名前を聞かせてくれるかい」

それからうつむいて身を縮ませている木之口にゆっくりと向き直る。

「木之口、繭です」

「じゃあ、繭ちゃんと呼んでいいかい」

小さくうなずいた彼女に、久代は続けた。

「今から小母さんが尋ねることに答えたくなかったら黙っていても
いいからね。」

そんな酷い事を言った人は、ご両親かい？」

「……パパです」

「そうかい」

苦いモノを食べたような表情で久代は頷いた。

「繭ちゃんのお父さんは、貴方にとってもひどい事をしたんだね」

蛇口から零れる水滴の音すら大きく聞こえるほどの張りつめた沈黙が落ちた。

二対の視線が見つめる中、木之口は小さくだがはっきりと頷いた。

「お母さんは？そのことをご存知なのかい？」

「……ケーキと紅茶」

「はい？」

「お父さんが私の部屋から出て行った後に、必ずもってきてくれるんです。」

お勉強大変ねって……」

「知って、いるんだね」

「でも、私の部屋にパパが来るようになるまえは、パパはよくママを殴ってたんです」

「どういう理由で、だい？」

「料理の味付けがしょっぱかった、一緒にテレビを見ていて同じ所で笑わなかった、

お出かけをするときに、支度がおくれた……。でも、部屋に来るようになってから

それがなくなつて、嬉しくて、だから、私がちよつとがまんすればから」

「そんな馬鹿な話があるか……」

再び佐々木の怒鳴り声が響く。

「親だぞ、一番子供を守らなきゃいけない人たちが……」

「ちよつと黙りな、兵ちゃん」

久代がたばこを挟んだ左手を佐々木の前に突き出す。

「まだ話の途中なんだよ。繭ちゃん、今もお父さんは貴方の部屋に来るのかい？」

木之口が今度は首を横に振った。

「私が……過呼吸発作を起こすようになって……ご飯もあまり食べられなくなつて

中学……2年の頃です。パパはぽっちゃりした子が好きみたいで……

だから、もう全て終わったことなんです。それなのに、まだ私はいじいじとそれにこだわって、ちつとも病気も治らなくてママを悲しませて……あれ、私、何を言っているんだろう」

いつのまにか木之口はぼろぼろと涙をこぼしていた。

時折しゃくりあげながら

「終わったことなんです、終わったことなんです」

と同じ言葉を繰り返し続ける彼女の肩を、久代が壊れモノを触るように

そつと優しく撫でる。

「繭ちゃん、これだけは嘘をつかないでくれ。本当に今は何もないんだね」

「はい」

「辛かったね、本当に辛かったね」

言いながらまるで幼い子供にするように、久代は木之口の肩をなでていた手を

背中にまわし、とんとんと優しくたたいた。

「そんな、私、私が悪いのに」

「そんなことあるわけじゃないか」

激しい音を立てて佐々木が両手をカウンターに叩きつける。酷い傷痕が残る頬に、木之口と同じように涙が伝っていた。

「木之口さんの父親は最低最悪の下種野郎だ。」

自分の娘だぞ、悪い虫から守るのが役目のはずだろう。

母親だって同罪だ、自分が殴られたくないばかりに

娘を生贄に差し出して。なんだよケーキと紅茶って……

見て見ぬふりをするよりよっぽど、よっぽどたちが悪いじゃないか

！！

「……佐々木さん、どうして、……泣いて」

「繭ちゃんの気持ちがよくわかるからだろうね」

真新しい布巾を差し出しながら、久代は言った。

「よく似た境遇だよ、あんた達二人は」

「……え？」

「兵ちゃんの顔に酷い傷をつけたのはね、実の両親なんだよ」

「そんな……ひどい」

ああそうだよ、と木之口の言葉に久代は大きくうなずいた

「この子は少しも悪くなかった。そしてそれは繭ちゃんも同じ事さ」

「……でも私は」

「あのね、まっとうな親つてのは、たとえ年頃になった娘が目の前で裸で寝っ転がっていたとしても、注意しこそすれ欲望を抱くなんてことは絶対にないんだよ。ましてや

それを娘のせいにする事なんか天地がひっくりかえってもありやしない。そんな事するのは親の皮をかぶった獣さ
気付かないふりをしている母親だつて同じだよ。

繭ちゃんは悪くない。このおばさんが胸を張って保障するさ」

「私……私……」

それ以上は言葉にならなかった。

カウンターの上に突っ伏して大声を上げて木之口は泣き出す。

「気のすむまで泣いて御覧。少しは楽になるからね」

まるで母親のような口調で久代は木之口に話しかける。

「えっと、あの」

「そつとしときな、今はね」

おろおろとする佐々木をたしなめて、久代は店のドアに
「臨時休業」の札をぶら下げた

続く

第七話 告白

「大丈夫？」

「ごめんなさい、こんな場所で泣きわめいてしまつて」

「謝ることじゃないよ、良かったね泣く事が出来て」

佐々木の言葉に、木之口は首を傾げた。

二十一時を回ったスナック「ククル」。

ようやく泣きやんだ木之口と佐々木は、

こっちの方が落ち着いて話せるだろう、と久代に言われて

カウンターからボックス席に移動していた。

「泣いたって何にもならないじゃないか

と思うんだけど、『泣く』ことは心を癒す効果がある、

無駄じゃないつてある人に教えられたんだ」

「それ、羽場先生でしょう」

「あたり。木之口さんにも言っていたかな」

こくりと頷いた彼女に、佐々木は続ける。

「俺の経験だけど、本当に苦しくて、悲しいときは泣けない。

感情がマヒして何も感じなくなるから。

気に障ったら謝るけれど、俺は木之口さんが

思い切り泣く姿を見てちよつと安心したんだ」

「あの、聞いてもいいですか」

意を決したような表情の木之口の問いに

今度は佐々木が首をかしげる。

「さつき、久代さんが言っていた事なんですけど……」

「ああ、この傷の事？」

ずっと佐々木が顔の傷痕を指でなぞる。

「楽しい話じゃないけれど、いいかな」

苦笑する佐々木に、木之口はもう一度頷いた。

「せめて甘いモノを飲みながら話しな」

とカウンターの中の久代がさりげなく
熱いレモネードを持ってきてくれた。

「俺は心中の生き残りなんだ」

マグカップの中で微かに揺れる透明なレモン色の液体を
見つめながら、佐々木は語りだす。

「母が信仰していた宗教団体に

父に内緒で全財産をこっそりお布施として寄付していたらしいんだ。
それに気づいた父が激怒して、ナタでめった打ちにしたらしい。

俺と、そして母を」

「そんな」

「そしてそのまま父親は首をつつたらしい。運ばれた先の医者腕が
良かったんだろうな、大怪我をしたけれど俺は助かったんだ」

語り続けるうちに、とつくに治ったはずの体中の傷がじくじくと
痛みだす。

「私より、私より佐々木さんの方がずっとひどい目に
あっているじゃないですか」

「そうかな」

レモネードを一口すすって佐々木はもう一度苦笑した。

「こういうことはどちらが酷いかなんて、比べる事じゃないと思う
んだ。

それに俺は記憶がないから、多分木之口さんみたいに辛いことを
思い返す事がないだけ、楽かもしれない」

「記憶が……ない？」

「うん、これが起こった時俺は十歳だったんだけど、全身に包帯を
巻かれて

病院のベッドに横になっている記憶が、俺の思い出せる一番古いも
のなんだ。

それより前はいくら思い出そうとしても何も浮かんでこない」

「お父さんやお母さんの顔も、ですか」

佐々木は頷く。

「写真がかろうじて数枚残っているから、顔くらいは判るけど後は全然。まあ、子供に余りかまわなかった人たちみたいだったから思い出した所で、碌な物じゃないと思うけど」

「そんなこと、ありません」

きつぱりと言い切って木之口は強く首を振った

「ママにおぶわれた時のぬくもりとか、一緒に焼いたお菓子の甘さとか

パパが一回だけだけど、本当に一回だけだけど、肩車をして野原をかけ回ってくれた時の風の心地よさとか、私だって

このくらいの楽しい記憶はあるんです。それがあるから、それを思い出せるから、私は今日まで頑張れた」

マグカップを包んでいた佐々木の手に、ずっと木之口の荒れた指先が触れる。そのぬくもりと柔らかさに

身体の奥で心臓がとびはねた。

「痛かったでしょう、こんなに酷い傷痕が残ってるんだから

痛かったよね、辛かったよね」

そう言いながら、細い指先で木之口は何度も佐々木の右手の傷痕をなでる

その頬をまた光る粒が、いくつも伝っていた。

「大丈夫だよ」

答えながら、佐々木は胸の奥の方からゆっくりと暖かいモノが満ちてきて

眼がしらが熱くなるのを感じていた。

「今はもう、痛くないから」

言っただとたんに、今まで感じていたじくじくとした傷の痛みが消える「それよりも俺は、木之口さんの方が心配だよ」

今度は佐々木の指先が、木之口の手の手甲にそつとふれる。

「こんなに荒れて、痛いよね。手首だって、痛いよね。

もうやめようよ、こんなこと。見ていて辛いよ」

「……はい」

手を触れ合わせたまま木之口は頷く。

「よかった」

ほっとしたような笑みを浮かべた佐々木の毗から
涙が一粒転がり落ちた。

「じゃあ、きちんと繭ちゃんを駅まで送っていくんだよ。兵ちゃん
「判っているよ、おばさん」

「あの、本当にすいませんでした。私の為にお店まで休みにしても
らって」

深く頭を下げた木之口に、久代は気にすることはないよと手を振っ
た。

「それより電話番号の書いた紙はしっかりもったね、何かあったら
遠慮なく

かけるんだよ。早朝でも、深夜でも」

「はい」

頷いた木之口の両肩をもう一度優しく叩いて、

久代は二人を店から送り出してくれた。

時刻は午後十一時、もうすぐ終電の時刻。

「本当にかえって大丈夫なの？」

心配そうに問いかける佐々木に、木之口は頷く。

「本当に、今は何もないんです。それに私、パパとママが待ってい
る家しか

帰る場所がないから」

「そうだね」

自分で自分が養えるようになるまで、子供は親の元にいるしかない。
星もまばらな今夜は、道沿いに並んだ家から漏れる光が
よりまぶしく、暖かそうに見えた。

でも、安全であるはずの家の中、暖かいはずの光の下で

恐怖と苦痛と悲しみに涙している子供達がいる。

家族神話がまだ根強くはびこるこの国では、

子供達の悲しい顔、悲痛な声は見えぬ聞こえぬふりをされ、
最悪の結末を迎えてしまう事が多い。

「私、夜道を歩くのが好きです、悲しいけれど」

独り言のように木之口が喋り出した。

「家から漏れてくる光が綺麗で、暖かそうで

いつまでも見ていたい。私の家も外から見れば

暖かそうな光が洩れてる。このまま家に入りたくない

何時間も近所をぐるぐるまわっていた事があるんです」

「俺は今でも真っ暗な家に帰るのがいやで、わざと遠回りして
明かりをたっぷりみて帰る時がよくあるよ」

世の中で、最も自分を愛しんでもらえるはずの人達に

体を傷つけられた者、そして心を傷つけられた者

癒えたはずの傷、見えぬ傷は今も痛みを伴って

見えぬ血を流しながら、心と体を歪ませる。

佐々木のお手がおずおずと木之口の方に伸ばされた

酷い傷痕がのこるその手を、ガサガサに荒れた手が

そつと握った。

「似てますね、私達」

「うん」

それきり二人はだまつたまま、暖かい光が並ぶ道を
駅に向かって歩いた。

続く

第八話 デート

「こんにちは、寒くなりましたね」

「うん、今日から肉まん始めたんだ」

「あ、本当だ。もう冬なんですね」

夕暮れ、紅色の光が差し込んでくるコンビニ「ハッピーマート」

二人で夜遅く駅まで歩いたあの日から、

木之口は一日おきほどの割合で佐々木が働いている時間帯に

店にやってくるようになった。

清算が終わるまでの短い時間の間に交わされる言葉は

あたりさわりのないもので、店員と常連客の域を出ることはなかったが、

それでも木之口の表情は来る度に明るくなってきて、そしてある日、

「あれ、木之口さんその髪」

「……変ですか」

レジカウOUNTERの前で恥ずかしそうに目を伏せる木之口の長い髪は、すつきりと首元で束ねられていた。

「いや……すごく、いいよ」

綺麗だが、重そうな髪の毛が顔の両脇から消え多分、

木之口の綺麗な卵型の輪郭が露わになって、

可愛らしさが三割ほど増して見える。

「ありがとうございます、あの、これ下さい」

彼女が差し出したほつとココアに機械を当てている間も

佐々木の視線は木之口に釘づけだった。

バイトが終わって狭く散らかった部屋に帰ってきてても

その面影がまぶたの裏にちらついて、ひとりベットの上でぽーっとしている

携帯電話が鳴った。

液晶画面に記された名前は『木之口 繭』

鼓動が急に早くなる。嫌な予感と期待がまぜこぜになってなぜか震えだした

指先で通話ボタンを押す。

聞こえてきた声は遠慮がちではあったが、今まで聞いた中で一番明るいものだった。

「あの、カットモデルの付き添いをお願いしたいんです」

「え、木之口さんがカットモデル？」

「はい、本当は友達が引き受けたんですけど、急に都合が悪くなって髪質がよく似ている私が代わりになったんです。

でも、彼氏を同伴するのが条件で、こんなことを頼めるのは

佐々木さんしかないんです。御迷惑でしょうけどお願いできませんか」

見えるわけでもないのに、佐々木は電話を耳にあてたまま激しく首を振った

「お、俺でよければ喜んで」

その答えに、電話の向こうからほっとする気配が伝わってくる。

「よかった、じゃあ次の日曜日、10時に隣町の駅で、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ」

電話を切った後、佐々木は埃だらけの部屋の真ん中で何度も万歳をくりかえし、

当日まで眠れぬ日々をすごした。

「うーん、これは綺麗だけど重そうな黒髪だねえ」

日曜日、隣町にある洒落た美容室で木之口にエプロンカバーをかけながら、

若い美容師は言った。

「思い切ってバッサリ切って、少しだけヘアカラーをしてみようか。」

せつかく可愛い顔をしているのに、隠れちゃっててもつたいないから」

ひとしきりそう説明すると、美容師は後ろのソファに腰掛けた佐々木を振りかえる。

「彼氏さんも後で何とかしてあげるからね、ワカメみたいなその髪」大きなお世話だ、と思ったが口に出せる性格ではない。

顔の傷を隠すために肩口まで伸ばした髪は、

確かに碌に手入れもしていないものだったので

結局佐々木は別の美容師の手によって、

木之口の隣に座らされることになった。

「どうしましょう、お連れ様と同じように

思いきって切ってしましましょうか」

「そ、それだけは、やめてください」

顔が露わになれば傷痕が余計に目立つ。

結局多すぎる髪を半分ほどの量にすいてもらい、毛先を整えてもらっただけで

見た目も大して変わらず、短時間で散髪は終了した。

「はい、終わりましたよ。綺麗になった彼女をよく見てあげてね、彼氏さん」

一足先に別室に設けられた待合場所に戻っていた佐々木は、美容師の後に

ついて現われた木之口の姿に目を丸くした。

綺麗だが重そうだった黒髪は首筋の辺りまで短くなり、ダークブラウンに

染められて、ゆるふわのウェーブまでつけられている。

それは髪を束ねていた時よりさらに露わになった綺麗な卵型の輪郭をリボンのように縁取り、彼女の可愛さを引き立てるアクセントになっていた。

前髪も大分短くなって、その下に隠れていた黒目勝ちの大きな瞳にじっと見つめられて、佐々木の心臓は全力疾走をした後のような状

態だ。

「こんなに髪を短くしたのは久しぶりで……、佐々木さん、私
みつともなくないですか？」

淡いさくら色のルージュが塗られた唇が放たれた言葉に、
佐々木は全力で首を振った。

「すぐく、綺麗になったね。びっくりした。うん、本当にびっくり
したよ」

「よかったね。さ、写真を撮るから並んでね」

美容師に促され、待合場所の片隅に設けられたスクリーンの前で
写真を撮ってカットモデルは終わった。後で選ばれた数組のカップ
ルが

ティーンズ雑誌に載るらしい。

「はい、これは今日の謝礼と記念写真」

と手渡された写真を見て佐々木はがっくりとうなだれる

街ゆく人が振り返るような美少女になった木之口と並んでいるのは
まるで柳の下の幽霊のような、自分。

もう少しカッコいい顔に生まれていたら、いや、せめてこの傷痕さ
えなければ。

がつくりと肩を落とす佐々木の隣で、木之口は謝礼の入った封筒と
写真を

大切そうにかばんの中にしまった。

「私、この写真ずっと大事にします」

笑顔でそう言われて、ほんの少しだけ心が軽くなった。

「付き合って下さってありがとうございました。」

バイト代でお昼を奢りますよ」

「いいよ、俺も髪を切ってもらったから。

でもお昼はいこうか、ただし、割りかんで」

一瞬曇った木之口の顔がぱっと明るくなる。

「あ、……ここ」

とりあえず駅に戻ろうか、と歩いていると

木之口が小さなホテルの前で足を止めた

入口の前に小さく「ビストロ オーシャン」とかかれた
立て看板が出ている

「どうしたの？」

「ちよつと前に友達の間で話題になったんです。

お料理もおいしいけれど、デザートやスイーツが最高だつて」

「そう、じゃあここ、はいるうか」

「え、でも高校生のお小遣いじゃちよつと……」

「いいから」

尻ごみする木之口を半ばひっぱるようにして

佐々木はホテルの中のレストランに入った。

昼も少しすぎたというのに、中は満員に近い。

「あれ、佐々木君じゃないの。可愛い子つれちゃつて」

「こんにちは、柳さん」

オープン式の厨房の中から親しげにかけられた声に、

佐々木は軽く頭を下げる

隣で木之口が目を丸くした。

「二人ですけど、いいですか」

「うん、すぐに案内させるよ」

柳の言葉にすぐにフロアスタッフが二人の元にやってきて
席に案内する。

「あ、あの、佐々木さん今の人は」

「このレストランのオーナーシェフの柳さんだよ」

「え、えつとなんでそんな人と」

遠慮がちに問いかける木之下に佐々木はいたずらっぽい笑みを向
けた

「このホテル、実はこの間木之口さんが会った久代小母さんがオ
ナーなんだ。

コンビ二のバイトを始める前、ここで皿洗いをさせてもらっていた。
バイトはまず身近でやれつて小母さんに言われてね」

「そうだったんですか」

ようやく納得がいったという風に、木之口は頷いた。

「だからさ、あの人がスナックをやっているのは半分道楽なんだよ。働くのが大好きなんだ」

「お待ちどうさま」

オーナーシェフ自ら皿を手にとってきたのを見て、木之口がもう一度目を丸くする。

「ちょ、柳さん。これ高いほうのランチじゃないですか。

俺達そんなに懐は豊かじゃないですよ」

「気にしない、気にしない」

二人の目の前にそれぞれ皿を置いて、柳は軽く片眼をつぶった。

「暗い顔してうつむいているばかりだった皿洗いのバイト君が、こんな美人な彼女を連れてきたお祝い。サービスランチ以上のお代は頂かないから大丈夫だよ。あ、せっかくだから後で新作のデザートも味見していつて。若いお嬢さんの意見をぜひ聞きたい」

手をひらひらとさせて厨房に戻っていく柳の後ろ姿に

佐々木はまったくもう、とため息をついた。

「相変わらず一言多いよ、柳さん」

「でも……すごくうれしいです」

と、綺麗に料理が盛り付けられた皿を笑顔で見つめる木之口。

「木之口さん、なんか変わったね」

「そうですか」

「うん、なんというか。明るくなった」

「多分、これのお陰だと思います」

大分すべらかさを取り戻した手がかばんから携帯電話を取り出す液晶画面にしろされたのは、久代の店の電話番号だ。

「この電話番号をもらって、いつでもかけてきていいよと言われてなんだかすごく安心したんです。私の事を気にかけてくれる人がいるって。」

先生も、友達も私の腕の傷を見ているはずなのに、

誰も何も言ってくれなかったからママも……」

と木之口は少し悲しそうな顔で言葉を切る。

「私の事なんか、だれも気にしてくれないんだと思い込んでいたんです。」

それに、友達の家話を聞くと私の家とは全然違っていて、自分だけが

皆と違うんだと思い知らされて、なんだか透明なガラス瓶の中にずっと一人で座っているみたいでした」

「俺もそう例えられた、羽場先生に」

ポツリと佐々木は呟く。

「皆気になると思うんだよ、この顔の傷。でも中々面と向かつては尋ねてくれなくて、

理由を知ったら知ったで思い切りひかれるか、やたらと同情されるかだし。」

まともな人間関係ってなんだっけと思っちゃうよな」

「でも、佐々木さんえらいです。ちゃんと働いているのだから」

木之口の真剣な表情に、佐々木は戸惑う。コンビニのレジバイトくらいで

えらいと言われたのは初めてだ。

「酷い体験をしたのに、それを乗り越えて生きている人がいる。」

その人も私を気遣ってくれる。そう思ったら、私もいつまでも過去を引きずっていないでがんばろう、て気持ちになったんです」

そう言ってもう一度淡い笑みを浮かべた彼女に、佐々木も笑い返した。

世界が急に明るくなった気がする。胸の中にゆっくりと、ほの温かい感情が

満ちてくる。

「よかったね。そんな気持ちになれて、本当に良かった」

「はい」

「今日は、お祝いだね」

「はい」

木之口は頷いてフォークをとった。

それからゆつくりと新作のデザートまで試食させてもらい、二人が朝待ち合わせた駅前に戻ってきたのは、もう夕刻だった。

「今日は本当にありがとうございました、とても楽しかったです
お料理もおいしかったです」

改めて丁寧な礼を述べる木之口に

「こっちこそ、こんな楽しい休日久しぶりだった」

とさっきまで彼女と繋いでいた右手をポケットに突っ込んで
佐々木は答えた。

まだほんわりと手の中に残るぬくもり、それを少しでも長く
留めておきたい。もしかしたら、これきりかもしれないのだから。
木之口が明るく元気になったなら、きっと自分より何倍も
明るく、格好のいい異性がいることに気づくだろう。

そう思うと少しだけ悲しくなった。
しかし

「あの、もしよかったらまた、こんな風に会ってもらえますか」
桜色の唇から零れた言葉に、佐々木は今日何度目かの
心臓がはね上がる心地がした。

まさにそれは自分が今何よりも聞きたかった言葉。

「お、おれでよければ、喜んで」

「ありがとうございます、じゃあ、また」

上ずった声で答えた佐々木にもう一度頭を下げて

木之口は改札口の中に入る。

その後ろ姿を佐々木は雑踏に消えるまで見送っていた。
コートの中でほの温かい右手を握り締めて。

続く

第九話 賢者の贈り物

「佐々木さん、何を見ているんですか」

「いや、あの街路樹のクリスマスイルミネーション
あんな綺麗なものが始まったんだなと」

「これ、私が小学生のころからずっとやってますよ」

「そ、そうだったっけ」

佐々木が耳まで真っ赤になって、照れ隠しにコーヒーを啜り

木之口はそれを見てコロコロと笑う。

午後6時、駅前のドーナツチェーン店。

2階の一番奥まった窓際の席が、二人の平日のデートの定番の場所だ。

木之口がカットモデルを引き受けたあの日以来、
聞えたなにかが外れたかのように、二人は頻繁にデートをするようになった。

と、いつでも平日はドーナツとコーヒーをお共に数時間おしゃべりを楽しみ、

休日も映画を見たり、景色の綺麗な場所を散歩するくらい。

そして恋人同士らしいことと言えば、歩いてる時にずっと手を繋いでいることくらいだ。

今日中学生でももう少し進んだ交際をしていると思うが、

佐々木は木之口の笑顔を見ているだけで満足だった。

「いやはや、恋の力はすごいものだね」

定期受診の日、羽場は感心しきつたように言った。

「一か月前とは別人みたいだ」

「先生は大げさですよ」

苦笑した佐々木に、羽場は大真面目な表情で首を振る。

「私以外にも言われなかったかい？」

「そういえば、中半店長と久代小母さんに、明るくなったとは言われましたけど」

「そうだろう。やっと瓶の底から出てこれたね、おめでとう」
その言葉に佐々木は顔が熱くなる。

確かに、昨日と同じ今日、今日の繰り返しの明日、の単調な日々にたった一人、木之口繭と言う名の女の子が加わっただけで今まで感じた事のない気持ち胸の中の生まれた。

明日を待ちわびる、ワクワクとした期待感。

始めて繋いだあの日から、佐々木の右手はいつもほんわりと暖かいままだ。

今まで地面ばかり見つめていた視線も少しづつ上を向くようになってきて

佐々木は初めてこの季節、夜の街の美しさに気付いた。

「木之口さんも随分きれいになっちゃって、ここだけの話診察室に入ってきた時、誰だろうと真剣に考えた」

羽場に顔をぐつと近づけて囁かれ、佐々木は吹きだした。

「佐々木さん、佐々木さん」

「あ、ああ。ごめん」

呼びかけられてはつと我に返る、どうやらまた窓の外のイルミネーションを見ていたらしい。

「もう、今日変ですよーっとして」

ブツと頬を膨らませて、木之口はドーナツをかじる。

最近、彼女は良く食べるようになった。

何だか太っちゃってとしきりに気にするが、あつた頃は青白かった頬がいまはすっかり健康なピンク色になって

佐々木は会うたびに木之口が美人になっていくような気がする。
荒れ切っていた手の甲も、すっかりなめらかさを取り戻し、
赤黒いみみずばれだったリストカットの後も、白っぽい筋を残すだけになっていた。

「いや、もうじきクリスマスだなあと思って」

「そうですね、何が欲しいですかプレゼント」

「それは俺が聞きたいよ、何が欲しい？」

「うーん」

木之口はしばらく上目づかいに宙を睨んでいたが

やがてぽん、と手を叩いた。

「賢者の贈り物ごっこしませんか」

「なんだい、それ」

「お互いが欲しいだろうと思うものを、プレゼントしあうんです。

当日交換して、沢山相手を喜ばせた方が勝ち」

「難しいなあ？」

「だめですか？ でもクリスマスが終わったら佐々木さん、受験だししばらく会えなくなるから」

しゅん、とうつぶいた木之口に佐々木は慌てて頷く。

「いいよ、勝つ自信0だけど」

「そんなことって、当日すごいものプレゼントされたらどうしよう」

両手を口に当てて嬉しそうに笑う彼女に、佐々木も笑みを浮かべる。

余りにもたわいなく、それでいてこの上なく幸せな時間。

この時間が1分1秒でも長く続くことを、佐々木は願わずにいられなかった。

「じゃあ、私来週からテストなんで、しばらく勉強に集中します」

「そうだね、俺もいよいよ本気出さないとなあ、二浪はさすがにいやだ」

「頑張ってくださいね」

「ありがとう」

いつもと同じデートの締めくくり、

駅の改札口で最後のおしゃべりをしていると

「繭、繭じゃないか」

人ごみの中から、声がかけられた。

振り返った木之口の表情がさっとこわばる。

「パパ」

足早に近寄ってきた男性は、大企業のビジネスマンと言った感じで高級そうなスーツを隙なく着こなしている。

細いレンズの眼鏡の奥から、切れ長の瞳がじろりと佐々木を睨みつけた

「いまかえりか、こちらの方は、たしか」

「前にもお会いしたことがあるでしょう、佐々木さん。

発作を起こした私を助けてくれた人です」

「そうか、その節はどうもありがとうございました」

「いえ、当然の事をしただけです」

丁寧だが、暖かさが微塵もない口調に、佐々木の身体が自然に固くなる。

「繭、余り遅くなつてはいけないよ、さ、かえろつか

ほら、繭の好きなケーキを買ったんだ」

そう言つて軽くかかげて箱をみた木之口の顔が、益々強張った

「あの」

「さ、いくよ繭」

佐々木が何かを言うより早く、木之口の父は彼女の肩に手をまわしてまるで恋人同士のように改札をくぐる。

「クリスマス、楽しみにしてますね」

「ああ、俺も」

まるでさがるような木之口の言葉に、佐々木は大きくうなずいた。

「早くしなさい、繭」

それを厳しい口調で叱りつけて、木之口の父はまるで彼女を抱えるかのような

格好でホームへと消えた。

次の日曜日、久々に一人で休日を通ぐ事になった佐々木は、朝食を済ませて

ホームセンターに向かった。

クリスマスの飾りがきらびやかな店内は季節がらなのか

家族連れよりもカップルが目立ち、それを自然に目で追っている自分に気付き

苦笑が浮かんだ。

何も繋ぐものがない右手が無性に寂しい。

最後のデートの日以来、何度かメールはしたが返信はなく、

佐々木はじわじわと湧き上がってくる不安を、テストに集中しているからだと言

い聞かせて紛らわしていた。

そこで長さ三〇センチほどの太い木材と、スケッチブックと鉛筆を買

うと、次白鳥の飛来地としていられている大きな池があると公園に向かう。そして、餌を食べたり、泳いだりする白鳥を一時間ほど熱心に写生した。

アクセサリー、洋服、スウィーツ。女の子が喜びそうなものは星の数ほどあ

って迷いに迷った挙句、佐々木は「手作り品」を贈ることに決めた。

高校時代、数学の次に好きだった美術の授業で作った木彫りの鳥が県の美術コンクールで入賞したことがあったのだ。

今日は天気が良かったが、流石に吹きさらしの屋外では、ダウンコートを着ていても身体が冷える。

「コーヒーでも買おうかな」

久しく出ていなかった独り言をつぶやいた時、ポケットの中で携帯が震えた。

液晶に表示された名前は

「木之口繭」

「もしもし、久しぶりだね」

嬉しさをかみしめて喋り出したが、

「ごめん、佐々木君。落ち着いて聞いてくれるかな」

木之口ではない、しかしき慣れた声が喋る内容を理解した瞬間、目の前が真っ暗になった。

続く

第十話 ごめんなさい

「木之口さん」

「……佐々木さん」

冷たい機械音が規則正しく音を刻み、
看護師や医者が無言でせわしく動き回る
坪内総合病院ICU。木之口は全身に管を入れられた状態で
ベッドの横たわっていた。

「……なんで、どうしてこんなことにを」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

かすれた声で呟きながら、ただ彼女は涙を流し続ける。

佐々木もそれ以上何も言う事が出来ずに、ただ

点滴に繋がれた木之口の右腕を痛いほど握り締めた。

「10分たちました、出てください」

佐々木の肩を叩いて、看護師が丁寧だが事務的な口調で告げる。

ICUでの面会は患者一人に対して1日2人、

しかも時間は10分以内と厳格に決められている。

後ろ髪をひかれる思いでICUを出た佐々木を、

羽場医師が別室へと導いた。

「シヨックだっただろう、大丈夫かい」

医師の言葉に反射的にうなずいたものの、起きている事全てが
透明な壁に隔てられているような、奇妙な非現実感があつた。

「失礼するよ」

再び扉が開いて入ってきたのは小鉢医師と見知らぬ若い男性。

「あの、木之口さんの容体はどうなんですか」

「佐々木君、今から順を追って説明するから、あせらずに
落ち着いて聞いてほしい、こちら、ソーシャルワーカーの小田島さ
ん」

小鉢医師の紹介に、若い男性が軽く会釈する。

そのまま二人の医師とソーシャルワーカーは、小さな机を挟んで佐々木と向かい合った。

「今日の午前中の事だ、木之口さんが救急車で運ばれてきた。ホームセンターのトイレの中で、除草剤を飲んだんだ」

佐々木は息をのむ。この街でホームセンターと言えば一つしかない。

「何時頃、だったんですか」

「10時頃だな」

佐々木が店に行ったのは、11時ごろ。僅か1時間の絶望的なすれ違い。

なんで今日に限ってのんびり朝食を食べて出かけたんだろう。

「幸い発見が早くて、即死にはならなかったんだが、飲んだ薬が問題だったんだ」

「……なにを、木之口さんは何を飲んだんですか」

「パラコート。非常に毒性が強く厄介な代物だ。はつきり言おう命が助かる確率は、3割以下だ」

苦い表情で小鉢医師は一言一言かみしめるように、佐々木に説明していく。

「でも、意識もはつきりしていて会話もできたんです」

「それがパラコート中毒の特徴なんだよ。急性期ではないかぎり意識ははつきりしているし、痛みも少ない。ただ肺線維症と言うつかいな症状をひきおこして、徐々に呼吸が出来なくなっていく」

「……そんな」

「もちろんそうならないように全力は尽くす。だが飲んだ量が多すぎるんだ。苦味剤や催吐剤が山ほど混入された除草剤を」

殆ど一瓶飲み干すなんて、多分、よほどの覚悟があったんだろう」

「そこで、君に聞きたいことがあるんだ」

今度は小田島が口を開く。

「少しショッキングな内容があるかもしれないから、君の病歴を考慮して主治医の羽場先生にも同席してもらった」

……シヨツキング、シヨツキングだって、これ以上どんな
シヨツクを受けろっていうんだ。

ふっと虚ろな笑いを浮かべた佐々木に、小田島と羽場は一瞬顔を見
合わせる。

「大丈夫です、続けてください」

「そうか、佐々木君と木之口さんの関係は、恋人。でいいかな」

佐々木は頷いた。

「実はね、彼女は搬送された時、身元を示すものを何も持っていな
かったんだ。

携帯電話も、財布もね。そしてこの紙袋をしつかり握りしめていた」
と小田島が皺くちやの紳士衣料店の名前が入った白い紙袋を取り出
し、

中身をテーブルの上に並べる。

黒にも見えそうなほど深い赤色のネクタイと、ピンクのハート形の
メモ用紙

「佐々木さん、少し早いけどクリスマスおめでとう。」

喜ぶ顔が見たかったけれど、ごめんなさい。

最後までめいわくかけて、ごめんなさい」

野腺からはみでるほどのみだれた文字が、そのまま木之口の心を
露わしているようで、佐々木は喉の奥でうめき声を上げた。

「この裏に佐々木君の携帯電話の番号が書かれていたんだ。

たまたま羽場先生が救命センターの方に用事に来ていなければ、
君が来るまで彼女の身元は分からないままだった」

「もっとも、木之口さんの家に電話をしても留守だったがね」

と羽場が続けた。

「佐々木君、君はその、木之口さんとどこまで深い関係だったんだ
い？」

尋ねたのは小鉢である。

「どういう、ことですか」

「搬送された時に、彼女の体をくまなく診察したんだが。その、膣

上部に

まあたらしい裂症があるんだ。言いにくいが、君は彼女に性行為を強要しなかったか」

見えない手で胃を思い切りねじあげられたような感覚に、佐々木は両手で口を押さえる。これ以上ショックなど受けようがないと思っていたのに

神様はどこまでも残酷だ。

「佐々木君、大丈夫か」

「終わったって言ったじゃないか。もう何も無いと言っていたじゃないか」

独り言のように呟き続ける佐々木。

「佐々木君、申し訳ないが知っている事を全て話してくれないか」それを痛ましげに見つめて、羽場医師は言った。

「そうだったのか」

「親からの長期間にわたる性的虐待。これが木之口さんの病の原因だったのか」

男性の私には、話しづらいな」

短くない時間をかけて佐々木が木之口から語られたことを全て話し終わると

部屋の中は重苦しい空気に包まれた。

「木之口さんの父親は、罪には問えるんですか」

「難しいな」

小田島が小さく首を振った。

「実の父親だ。本人の証言だけでは中々……」。

せめて精液などの物証がとれていたなら警察に連絡できるんだが」

「そうなん、ですか」

鉛のような絶望が、佐々木の背中にのしかかってくる。

ただ親と言う理由だけで、一人の女性の心と体に癒せない傷を刻ん

でも

罪に問われることはない。

「ただ、この話を聞いた以上、すんなりと木之口さんご両親を
会わせるわけにはいかないな。ありがとう、よく話してくれた。」

小田島君、至急児童相談所に連絡して」

「わかりました」

「俺はもう一度患者の様子を見てくる」

医師達の言葉が徐々に遠ざかっていく。

まるで下降するエレベーターに乗った瞬間のような奇妙な浮遊感が
あった。

「佐々木君、佐々木君、大丈夫か。佐々木君」

まるで水の中から喋っているような羽場医師の言葉を聞いたのを最
後に

佐々木の意識は途切れた。

目を開けるとくすんだ白い天井が飛び込んできた

「気がついたのかい、兵ちゃん」

「おばさん…… どうして」

「羽場先生が電話をくれたんだよ。話は大体聞いたよ。
酷い事だ。なんてひどい事なんだろうね」

声を震わせる久代に、佐々木は小さく頷く。

「おれ、気絶したの？」

「あれだけ酷い話を聞いたんだ、当たり前だよ。
気分はどうだい？」

「大丈夫」

そう答えてゆつくりと起き上がると、看護師が慌ててやってきて
体温や血圧を一通りはかれた。

「何もないみたいだね。じゃあ帰ろうか。ゆつくりとやすまないと」

「いやだ、帰らない」

まるで小さな子供のように佐々木は首を振った。

「俺は木之口さんのそばにいる」

「兵ちゃん」

その背をなだめるように、久代は優しくなげた。

「そうするためにはまず支度を整えないとね。」

大丈夫、一度帰って色々準備をして戻ってくるくらいの時間はあるよ」

「で、でも」

「そのまま居座るなら、きつと小鉢先生に叩きだされるよこれ以上患者を増やすなって」

その言葉に佐々木はやつとうなずいて、のろのろとダウンコートを羽織った。

寝かされていた病室はどうやら救命センターの一室だったらしい。

ドアを開けるとすぐに、なにやら言い争う声が聞こえた。

「連れて帰るなんて、無理です」

「どうして、助からないんでしょう、ならばせめて

せめて最後はうちで過ごさせてあげたいんです」

「まだ助からないと決まったわけではありません」

「でも、主人もそう強く望んでいます」

「無理です」

「私は親ですよ、子供の事を決める権利があります」

困惑顔の看護師の肩に綺麗な紫色にそめられた

爪をたてて、見覚えのある中年女性がわめいている

「落ち着いてください、木之口さん」

「弁護士を、弁護士を連れてきます」

「……木之口さん」

慌てて分厚いガラスで仕切られたICUの中を見ると

木之口が体中の管を引きちぎる勢いで、首を振っていた。

「小母さん」

「何て親だい」

忌々しげに久代は舌打ちする。

「俺、抗議してくる」

「まちな」

二人の間に割って入ろうとする佐々木を久代は押しとどめた。

「子供が一人食い下がった所で、親という絶対者にはかなわないんだよ」

「でも、でもそのままじゃ」

命を手放してでも逃れたいと思った親の元に、木之口は再び連れ戻されてしまう。

「久代さんに考えがあるよ。ただし、それには繭ちゃんの協力が必要だけどね」

わめき続ける木之口と母親と、ICUの中を交互に見つめて久代は言った。

第十一話 このままでいたい

固い足音をたてながらやってくる男を、
佐々木は緊張で強張った顔で迎えた。

夜も大分更けた坪内総合病院救急救命センター待合室。

いいかい、相手は人に対して平気で手を上げるような男だ
絶対に人の目のある場所で話すんだよ。

脳裏にこだまする久代の言葉。

「繭に会わせてもらえないと妻から聞いたんだが」

喋りながら、男の薄い唇の端がピリピリと神経質に震えている。

「はい。本人も望んでいませんし、俺も許さない」

腹の底に力を籠め、両足を踏ん張って佐々木は頭一つ分高い
男を睨みつける。

震えていた男の唇の端が、笑いの形に歪んだ。

「君に何の権限があつてそんな事を言うんだ。」

私は繭の親だ。あの子に会う権利も、行動を決める権利もある」

「木之口さん、いや、繭はもうあんたの子供じゃない」

その言葉に、男の眉が顰まる。

「どういうことだね」

「俺の、妻だ」

酷い傷痕の残る手が、男の眼前に一枚の書類をつきだす。

必要事項が全て記入され、捺印、受理済みの婚姻届。

「なんだ、これは」

男の怒声が待合室一杯に響き渡った。

身なりが整っている分、それは酷く奇異な光景で

ソファに座っていた数組の患者の家族が一斉に二人の方を見る。

「大きな声をださないでおくれ」

その中で声をかけたのは、そろそろ老いが始まっているとはいえ
口元や、仕草に匂うような色気が漂う女性だった。

「皆の迷惑だよ」

「こいつが、こいつが悪いんだ。」

こんなものを見せて俺を怒らせる、こいつが悪い」

幼児じみた言いわけをする男に、女性――久代はため息をつく。

「怒らせてなんかないよ。兵ちゃんは事実を告げただ」

「繭は、繭はまだ17だぞ。子供なんだ、それを結婚だと、ふざけるな、誰が認めるか」

「別にあんたに認めてもらおうなんて思ってない」

と佐々木は言った。

「女性はい6歳から結婚できるんだ」

「未成年の結婚は親の許可がいるはずだ。私も、妻も

こんなふざけた物に許可を出すはずがない」

「確かにいるよ、親の許可はね」

と久代が口を挟んだ。

「でもね、両方の親の許可が必要だなんて、

法律のどこにも書いていないんだよ

本人達に固い意志があつて、どちらか片方の親が許可すれば、

未成年同士でも結婚は成立する。

結婚した以上もう未成年じゃないからね。

親の言う事に従う義務はないんだよ」

「じゃあ、こいつの親が許可をしたのか。どこのどいつだ、

こんなばかげた結婚を許したのは」

「私だよ」

間髪いれずに、久代は答える。

「繭ちゃんあんたらみたいな親の皮をかぶった獣と離れるには
それしか方法がなかったからね」

獣と言う言葉に、男の血走った両目が限界まで見開かれた。

にぎりしめた拳がぶるぶると震えている。

「獣、獣だと」

「ああそつだよ、実の娘に欲望を抑えられない男は獣以外の

何ものでもないだろう」

「お、お前らは、お前らは繭の虚言を本気にしたんだな。あの子は息を吐くように嘘をつく、厄介な子なんだ。

今回もこうやって皆の注目を集めようとあんなことをして」

「やれやれ」

久代は大げさにため息をついた。

「言う事に事欠いて、ついに繭ちゃんをうそつき呼ばわりとは本当に救われない、薄汚い男だね」

「これ以上木之口さんを侮辱するな」

怒りにも、讒言にも全く動じない佐々木に

男の顔から滝のように汗が滴り落ち、きよろきよろと落ち着きなく目が周囲を見回す。

「と、とりあえず今日は繭と合わせてほしいんだ。

お、親として話しておきたい事もあるし。そ、それに

証拠がないだろう、証拠が、私がその、実の娘に

何かをしたと言う証拠が」

「……ここに運ばれてきた時の診察で

木之口さんの体内からあんたの体液が見つかったんだよ」

「嘘だ、俺はあの時避妊具をつかっていたんだ、体液が残るはずがない」

佐々木の言葉に叫び返した男は、そこではっとしたように口をつぐんだ。

「聞いたね、小田島さん。先生」

「はい」

久代の言葉に促されるように、待合室のすぐわきにある診察室の扉があき

ソーシャルワーカーの小田島と、羽場医師が姿を現す。

「申し訳ありませんが木之口さん、今の言葉を聞く限り貴方とお嬢さんを会わせるわけにはいきません」

「別室に児童相談所の職員がおります、どうかそこで

もう一度詳しいお話を聞かせてください」

白衣をはおった二人の言葉に、男の全身が大きく震えた。

「いきましよう」

その肩を小田島がそつと叩いた瞬間、男が佐々木に掴みかかった。

「繭は俺のモノだ、心から身体から全て俺のモノだ、

誰にもやるものか、俺は親だ、親なんだから、当然の権利だ」

「兵ちゃん」

「佐々木君」

悲鳴が上がる中、男は佐々木の襟首をつかもうとして、そして逆に腕を背中にねじり上げられる。

「ふざけるな」

痛みに顔をゆがめる男の耳元で、佐々木は押し殺した声で告げた。

「木之口さんはあんたのモノじゃない。一人の独立した人間だ。

これ以上薄汚い口を開くなら、俺はこの場であんたを絞め殺す」

佐々木の左手が男の首にまわされ、ねじり上げた手をつかむ手に力がこもった。

男がこれ以上ないほどの、情けない声で悲鳴を上げ

助けてくれと哀願する。

「もうやめな、兵ちゃん」

佐々木の腕を、久代がそつとはずす。

そのまま床にへなへなと崩れ落ちた男を、小田島が抱えるように何処かに連れて行った。

「あんな男、兵ちゃんが手を汚す価値なんかないよ」

「なんで……」

コンクリートの壁を激しくたたいて、佐々木は呻く。

「なんで、あんな男が、あんな男が親なんだ」

その問いに答えられる大人はこの場に誰もいない。

ただ、痛ましげな表情を全力で恋人を守り抜いた青年に向けるだけだ。

「佐々木君」

長い長い沈黙の後、ようやく羽場医師が口を開いた。

「こんなことを言っても何の慰めにもならないかもしれないが、親の元で過ごす時よりも、その後の、伴侶と過ごす時間の方が人はずっと長いんだよ。木之口さんの酷過ぎる半生の記憶は素晴らしい伴侶である君がきつと癒せると、私は信じている」

「……その時間が、彼女に残されていたら。俺は全力を尽くします」
暗い表情で答えて、足を引きずりながらICUの中に入っていく
佐々木に、今度こそ誰も、何の言葉もかけることができなかった

「木之口さん、具合どう？」

「うん……、大丈夫。ありがとう」

ICUの中でも隔離された個室でベッドに横たわっていた木之口は
佐々木に笑顔を向けたが、その青すぎる顔色と

荒い息が彼女の言葉が嘘であることを無言で告げていた。

「パパは……」

「もう来ない、お母さんもそうだよ。」

だから安心してゆつくり体を治して木之口さん」

「ありがとう、私酷い子供だね。親が来ないことがこんなにうれしいと思うなんて」

「ちがうよ」

ベッドサイドの椅子に腰かけて、木之口の顔を覗き込みながら

佐々木はゆつくりと首を振る。

「木之口さんの思いは当然だよ。お願いだから自分をこれ以上責めないで」

「あのね」

「なに？」

「私の事、名字で呼ばないで。結婚したんでしょう、だから名前を
読んで」

「い、いや。こ、これは木之口さんから両親を引き離す、緊急的措置で

ちや、ちゃんと後で理由があれば取り消せるって小母さんが……」
慌てる佐々木の顔を木之口はじっと見つめる。

「だめですか」

「え、えっと」

「このままじゃ、駄目ですか」

荒い呼吸の下、木之口は声を振り絞る。

「私は、兵衛さんの妻でいたいです」

「ま、繭」

まだどこかぎこちなく、しかし大切そうに佐々木は妻となった人の名前を呼んだ。

「俺も、俺もこのままで、いや、このままがいい」

「はい」

目に涙をためて、だがこの上なく幸せそうな笑みを浮かべる
木之口の唇に、佐々木は初めて自分のそれをそっと重ねた。

続く

第十二話 最高のプレゼント

「もうすぐ、クリスマスだね」

「本当だ。この部屋はテレビもないから判らなくなっちゃうね。街はきれいでしょう」

ベッドに横たわり、真っ白な顔で荒い息をつきながら

喋る木之口に、佐々木は頷いた。

街中に満ちる浮ついた空気も、

ICUの中の、さらに隔離された個室であるここまでは入ってこれない。

壁にかかっているカレンダーの絵がらだけが、僅かに一年で最も華やかな行事の雰囲気を微かに伝えていた。

医療機器の電子音も、慌ただしくかけ回る医師や看護師の足音も扉を閉めてしまえば殆ど聞こえなくなる。

深い海の底のような静寂に満ちたこの部屋が、

「ヘブンズルーム」と呼ばれている事を佐々木は先日知った。

もう、助かる見込みのない患者が

最後に家族と水入らずの時を過ごせるように作られた、特別室。

昨日から木之口の口には酸素マスクがあてられるようになった。

それでも呼吸が苦しそうなままなのは、肺が酸素を取り込むことが出来なくなっているからだ。

残された時間は、あとわずか。

お互いに判っていないながら、それを口に出す事は決していない。

佐々木は妻の枕元に座って木片を削り、木之口はそれを黙って見つめて

時を過ごす。酷い傷痕が残る手の中で、木片は徐々に鳥へと姿を変えていく。

「さっきね、お義母さんがきてくれたの」

「そう」

木之口が言うお義母さんとは、久代の事だ。

彼女の實の両親は、あの日以来姿を見せない。

「あの手の人間はね、自分の罪を突き付けられると弱いんだ。木之口さんのお父さんは自分の罪を妻に押しつけようとして逆に妻から長年のDVを訴えられて、ついに逮捕されたよ」

羽場医師がそつと佐々木に耳打ちしてくれたが、

そんな事はもうどうでもよかった。

全ては遅すぎたのだから。

「クリスマスプレゼントは何がいいって聞かれたから

……わがまま言っちゃった」

「何て言ったの？」

笑顔で交わされる、穏やかな会話。

流れていく暖かい時間だけが、親の資格のない親の元から命をかけて足搔らい、逃げ出した末に与えられた

ささやか過ぎる報酬だった。

「結婚式」

「え？」

聞き返した佐々木に、木之口は恥ずかしそうに笑う。

「ウエディングドレスを着るの、夢だったんです。

子供っぽいでしょ」

佐々木は首を振った。

「そんなことない。わかった、繭が退院したら

そのまま結婚式場に行こうよ。準備はしておくから」

「本当に？」

「ああ、絶対に。約束しよう」

「うん、指きりゲンマン」

絡み合う小指と小指。佐々木は胸が潰れそうな想いで

お約束の歌を口ずさむ。

「指きりゲンマン嘘ついたらハリセンボンのーます」

同じ言葉を唄いながら、木之口の目から涙がこぼれおちる。

この約束は決してかなう事がない。
神様、神様。

ミル君が印刷されたハンドタオルでそれをぬぐってやりながら
佐々木は唇をかみしめて、心の中で絶叫する。

本当にあんたがいるのなら、こんない子をあんな親の元に
うまれさせた償いをしてくれたっていいじゃないか。

願い事の一つくらい、叶えてくれたっていいじゃないか。

「おや、兵ちゃんもいたね。丁度いいや」

勢いよく開けられた戸に驚いて二人が振り返ると、
そこには大きな箱を二つもった久代が立っていた。

「じゃあ早速始めようか」

「お、小母さん始めるって何を」

戸惑う佐々木に

「結婚式さ。これを見て御覧」

そう言つて久代は箱の一つをベッドの上に乗せる。
蓋をあけるとその中から、純白のドレスが現れた。

「……お義母さん。これ」

「知り合いからね借りてきたんだよ。」

デザインはちよいと古いけど我慢しておくれ」

「お、小母さん。病院でこんなことしていいの」

「普通なら許さないんだけどね」

と苦笑しながら入ってきたのは小鉢医師だ。

「クリスマスを病院で過ごさなきゃいけない

新婚さんのささやかな願いくらい叶えてあげないと

可哀想だ。さ、佐々木君は職員のロッカールームで

着替えて。久代さん、手伝いの看護師は何人いるかな」

「そうだね、三人ほどよこしてくれないか。

さ、兵ちゃん。さつさと着替えておいで」

久代の言葉に押し出されるように、佐々木は
もう一つの箱を持って、病室を出た。

「うーん、もうちょつとお前に上背があればなあ」

「どうせ七五三ですよ。放っておいてください」

着なれないスーツの着替えを手伝ってくれた研修医、片の

苦笑交じりの言葉に、佐々木はぼそりと反論する。

久代の借りてきてくれたスーツは、小柄な佐々木には大きすぎて袖や裾をだいぶ折り返して見たのだが、鏡の中に映った自分は父親の服をいたずらで着た子供のように、滑稽なことこの上ない。

「まあ、結婚式では新郎など刺身のつまだ。誰も見ない。

新婦が綺麗ならば万事OKなんだからな」

さらに酷い言葉で畳みかけられて、佐々木はぶぜんとした顔で病室に戻って……息を飲んだ。

「似会うかな？」

はにかんだ笑みを浮かべて、少しおぼつかない足取りで立ち上がった木之口は、童話の中のお姫様そのものだった。

ふわりと広がったスカートも、丸く膨らんだ袖も、透き通ったベールも

この上なく可愛らしく、美しく、彼女を飾っている。

看護師がどこから買ってきてくれたのか、赤いポインセチアのブーケが

白一色の中で、絶妙なアクセントになっていた。

「……綺麗だ。すつごく綺麗だよ」

それ以外の言葉を忘れ果てたように、佐々木は同じ言葉を繰り返した。

「さ、ここに座ってくれ。本当の牧師じゃなくて申し訳ないが

一応洗礼を受けたクリスチャンだ」

二つ並んだパイプいすの前に、小鉢が黒表紙の聖書を抱えて立つ。久代と研修医の片と羽場医師と、そして数人の看護師が見守る中

ささやかな結婚式がはじまった。

「佐々木兵衛。貴方は木之口繭を妻とし、

その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、

富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、

これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「はい」

佐々木が頷くのを見て、小鉢は木之口の方に身体を向ける

「木之口繭、貴方は佐々木兵衛を夫とし、同じことを誓いますか」

「……は、……はい」

酸素マスクを外した苦しい息の下、

それでも木之口はしっかりとした口調で答えた。

「よろしい。神の御名の元に二人を夫婦と認めます」

控えめながら温かい拍手が一齐に沸き起こる。

戸惑ったように、しかし幸せそうに笑いながら

二人は何度も拍手をしてくれた人々に、頭を下げた。

「……指輪、なくてごめん」

キスコールに押されるように、新婦の唇にぎこちなくキスをしながら佐々木がささやく。

「うっん。……さ、最高の……最高の……プレゼン……ありが……」

ふうわりと夫に微笑みかけ、途切れ途切れにそこまで言つと

木之口は床の上に花が落ちるように崩れ落ちた。

もう意識を取り戻さないかもしれないと言われた木之口が

目を開けたのは、丸一日をすぎた夜。クリスマスイブの日だった。

「……気がついた？」

両手で木之口の手を握りながら、泣き笑いの表情を浮かべる佐々木に彼女は微かに笑い返す。その目から涙が一粒転がり落ちた。

「……うん……でも、まだ……眠いの。可笑しいね、いっぱいねむった」

「……はずなのに……まだ眠い」

「いいんだよ、繭が気がすむまで、たっぷり眠ったらいいんだよ」
佐々木の言葉に、木之口は小さくうなずいた。

「……ごめんね、兵衛さん……空の上で……まってる……」

「待たなくていいよ。俺、すごい爺さんになっていくから
きっと繭には判らない。だから、空の上でたっぷり休んで
また、生まれなくなったら降りてきなよ、今度はちゃんとした両親
の元に」

「うっん」

木之口は微かに首を振った。

「判るよ、どんな姿になっても……私は兵衛さんが……わかる
……だって、私は……兵衛さんの、妻だから……」

ふっと木之口の瞼がおちた。

微かな力で握り返されていた手からも力が抜け、
規則正しいリズムを刻んでいた電子音が単調な一本の音になる。

「繭？」

問いかけにもう答えはない。

傍らに立っていた小鉢医師が、ペンライトで両目をてらす。

「一時三十七分、ご臨終です」

「……おやすみ、そしてクリスマスおめでとう」

片方の手で急速に冷たくなっていく妻の手を握りながら
佐々木はもう片方の手に彫り上がったばかりの水鳥の彫刻を握らせる。

今にも飛び立ちそうなそれは、まるで全ての苦しみから解き放たれた
少女の魂そのものに見えた。

第一部 終わり

第十二話 最高のプレゼント（後書き）

もともとはとある作品の二次創作で書き上げた作品をオリジナルに仕立て直しました。

命をかけて愛する人を守った佐々木君

彼の10年後から 第二部が始まります

引き続き御拝読をよろしくお願いいたします

感想もお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5578j/>

砂の船

2010年10月11日05時12分発行